
ソードアートオンライン くのいち忍法伝

MITUKAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードアートオンライン くのいち忍法伝

【Nコード】

N1449BA

【作者名】

MITUKAN

【あらすじ】

ソードアートオンライン、この世界にβテストから参加していたカスミは

デスゲームと化した今もくのいちとしてプレイしていた。

だが、彼女の知らぬところで、事態は大きく変容を遂げようとしていた。

ソードアートオンラインの2次作品です。原作キャラはでません。設定は文庫版準拠に作者の脳内設定で補完しています。

一章ではほとんど戦闘はありません。

以前にも原作キャラを使って書いてみたのですが、設定の祖語のため削除してしまいました。

今回は多少の祖語には目をつむっても書き上げるつもりですので、どうかよろしくお願いいたします。

ギルドの解散

ギルド解散

「うーん、ようやくここまでできたか……」

隠しクエストを終え、ようやく一般フィールドに戻ってこれた私は大きく伸びをした。

「あんなけ準備したのに、丸々一晩かかるとか、無茶苦茶だわ」
クエストを開始したのは、昼すぎだったのに、まさか、朝日を拝むことになるなんて……

「まあ、これで念願の体術スキルも手に入れた訳だし、これからガンレベ上げて攻略組に追いつかなきゃ。」

うーん、ちょっとソロが長すぎたのか、独り言が多くなっちゃたな……

気をつけないと変に思われるかも……

とりあえず、ここ最近クエストクリアのために連絡を絶っていたギルメンに報告と現状確認をしなくっちゃ。

「ダンジョンに籠る前は、確か25層の迷宮区はほぼ攻略も済んだんだよね……」

あつ、また口に出ちゃった。

反省しながらメニュー画面を呼び出す。

うわっ、ギルメンからのメールがメチャクチャ貯まってるよ……

「あらっ、ギルマスからもメールがきてる……珍しいわね」

貯まったメールの中に重要を表す点滅を繰り返すメールがあった。

差出人は私が所属するギルド 風魔忍軍 のマスター『コタロー』からだった。

なにかあったのかな？と最新のメールを置いて確認して……

「はえ!？」

あっ、変な声が出ちゃった。

*

*

*

私がこのゲーム、ソードアートオンライン（以下SAO）に閉じ込められてから半年が過ぎていた。

私のキャラクター名は『カスミ』、
現実では高校2年生だが、このSAOでは千人のβテストに当選した先行組のひとりとして高レベル組に名を連ねている。

私がβ時代から所属していたギルド 風魔忍軍 はこのSAO世界で忍者型プレイを目指す一群だった。

SAOには戦闘職という概念がなく、選んだ武器に対して、既存のMMOにあてはまるタイプでプレイヤーが勝手に分別しているだけ。

だから専用装備なんてのも存在しないので、規定の装備を組み合わせ、
わせてそれらしくする、いわゆる「なんちゃって」装備なんだけど
……

β時代にはAGI（敏捷）を高め、フィールドを縦横無尽に駆け回ったもんだ。

まあ、火力不足の所為でタゲりすぎたMOBを他プレイヤーになすりつけたりしたもんだから結構評判悪いんだけど……

しかし、本サービス開始後まもなくなされたデスゲームの宣告が事態をおおきく変容させた。

私達のギルドは当初、三十人ほどいたんだけど、デスゲーム判明後、脱退者が半数に及んじやった。

理由はいろいろあったけど、ぶっちゃけ「デスゲームでロープレなんてしている場合じゃない」の一言につきる。

そんななか私は、「ともかくレベルをあげなきゃ」とすぐにフィールドへと駆け出した。

私がこんなに強気に出れたのは、やはりβ時代の経験によるとこ

ろが大きい。

レベル制を採用しているSAOでは、低レベルのMOB相手だと文字通り無双ができる。

まあそれ自体はみなわかってるだろうが、やはり実際に経験しているのといないのでは覚悟が変わる。

そして私がスタイルを変えなかったのは、選択していた武器 短剣 はAGI重視で手数稼ぐことにより攻撃力を補えるから。(「逃げる」という手段を捨てがたかったってのもあるんだけど……)

その後、β時代によくいつしよに行動した男女ペアが追いついてきて、三人でレベル上げにいそしんだ。

ギルド 風魔忍軍 では、上階につづく各層の迷宮区でのボス戦以外は各自が自由行動をしてた。

β時代、私はもっぱらこのハヤブサとツバメというキャラ名の二人と行動していた。

(二人はMMOのオフ会で知り合って、付き合ってるんだって。ちっ、リア充め)

正直、ギルメンでも名前だけ知ってるって人のほうが多かったりするんだけどね。

そんな目的意識の低いギルドなんだけど、β時代に未達成だったクエストの成就だけは本サービスでは、とみんながいきこんでいた。

それはエクストラスキルのひとつ 体術スキル 獲得クエスト。

β 終了間際の第7層で仕入れた情報により、そのクエストが第2層にあることだけは掴んでただけど、クエスト発動条件などは一切わからないまま本サービスを迎えちゃった。

開始一か月後に解放された第2層をしらみつぶしに探したけど、結局、第7層解放まで見つけれなかった。

だけど、第7層で必死の聞き込みによりついにクエストへの隠し通路の存在を確認。

即、数名がクエストに挑んだ。

私達三人からもハヤブサが挑戦した（私はスロットの空きがないので今はパス、ツバメは「MOBを殴るなんて無理！」と最初から取る気無し）。

そのハヤブサが戻ってきたのは三日後だった。なんでもSTRの要求値がかなり高ったようで、

「カスミも挑戦するなら、武器を変えてでもSTRを伸ばしたほうがいい。」とのこと。

（詳しい内容は「行っただけのお楽しみ、っていうかできれば同じように苦労してほしい」と苦笑された。ふんっ）

現在Lv20の私は（第10層までに出るMOBはLv10までで、レベル差が10離れると経験値が入らないのでLvは20までしか上がらない。）Lv30まで保留とし、Lv25からダンジョンに行き、両手剣で集中的にレベル上げをしてから挑戦することにした。

そして2週間前にLv25に達した私は、二人と別れ、低層に移

動。

始めの一週間は両手剣のスキルに慣れることに費やし、その後一週間ダンジョンに籠り続けた。

そして昨日の朝、ようやくLv30に到達した私は、そのまま第2層に降り、街で昼食を取ってからクエストに挑戦した。

クエストの内容は「素手で大岩を砕く」といったとんでもない内容だった。

そしてその大岩は、

「この鍛え上げたSTRを見よ！」とばかりに振り下ろした私のこぶしをあっさり跳ね返した。

そのあとクエ管理のNPCのじいさんに顔に落書きされ、クエスト終了までリタイアできないと告げられる。

そして日も暮れ、夜も過ぎる頃には半泣きで岩を叩き続ける私の姿があった。

やがて空が明けかかってきた時、ようやく歓喜の瞬間が訪れた。

すると「じいさん、起きてたの？」と言いたくなるようなタイミングで現れたNPCは（NPCなんだから当たり前っちゃ当たり前）、あっさりとスキルを渡すと、

「精進せいよ」との一言を最後に小屋に戻って行った。

帰る前にその小屋でちょっと寝かせてと頼みたかったのに……

仕方が無いので、フラフラする頭をこらえながら帰路についた。
(転移用の結晶石は使えなかった)

*

*

*

ようやくフィールドに戻った私の目は今、開かれたメニュー画面で
点滅する一文に釘付けとなっている。

『ギルド 風魔忍軍 は解散する。以後は各自おのおのの責任を持
って活動すること。 コタロー』

ギルドの解散（後書き）

文庫版準拠とうたっていないながら、さっそく破っています…orz

ギルド風魔忍軍と体術スキルに関しては、川原礫先生ご本人のHP、WordGear内の

『続・星なき夜のARIA』から拝借いたしました。（2012/01/03現在 閲覧可能）

これ以降、Webや公式同人誌の設定と喰い違ってくるかもしれませんが、
せんが、作者は未読なのでご了承ください。

ただ、感想などでお教えいただき、手直して反映できるのであれば
させていきたいです。

また、無理な場合もその旨ご報告させていただきますので、ご意見
おまちしております。

再会

再会

「ちょっと、どうゆうことよー!」

会ってそうそう、あいさつもそこそこにハヤブサとツバメを問いただした私。

あれからツバメにメールすると、「すぐ行くから第2層の主街区で待ってて」との返信。

ああ、待ってるって寝ちゃいそう……

だが、そんな眠気も二人の姿を見ると、一気に吹っ飛んだ。

「まあまあ、ちょおと落ち着いてよ。これから説明するから。」

宥めてくるツバメの装備は、皮装備で部分保護したいわゆるシーフ型と呼ばれるもの。

「こつちもカスミに連絡とれなくてやきもきしてたんだぞ。」

と、軽金属の胸当てをした、剣闘士風のハヤブサ。

二人とも忍者らしさのかけらもなかった……

「ともかく、どこかNPCの店に入ろう。いくらプレイヤーが少な

いといつても立ち話ですむ話じゃない……」

ハヤブサの提案に、眠気でごまかされていた私の空腹センサーが活動した。

そういえば、昨日の昼からなんにも食べてなかったわ……

*

*

*

「つまりは、第25層のボス攻略が原因なのよ。」

手近のNPCレストランにはいるやいなや、サンドイッチにパスタとスープを頼んでから質問し出したんだけど、料理がくると食べるほうに夢中になっちゃった。

パスタをほうばりつつ左手でサンドイッチを探る私にあきれながら、ツバメが話をつづけた。

「あにいぐわ、あっあの？」（なにがあつたの？）

食べながらも先を促す私に、

「食べながらしゃべるな。とりあえず黙って聞いとけ。」

ハヤブサがたしなめてくる。くうゝツバメには尻にしかれてるくせに、えらそうだ……

「そもそもはギルマスを筆頭にギルドのメンバー数人が、ここ何層か軍に強力していたってことからなのよ。」

「ボス戦以外にも迷宮区の斥候やレベル稼ぎスポットの陣取りなどかなり深くかかわってたようなんだ。」

「まあ、その辺までは上手くいったみたいなんだけど……」

「25層のボスがとんでもなかったんだ」

「私達はほらっ、あんまりボス戦に参加しなかったじゃない。だから他と比べてっていわれてもピンとこないんだけど、サイズも攻撃力もけた違いだったんだって。」

「で、軍から大勢の死者が出るっていう最悪の結果になったんだが、その時に……」

「うちのギルドからも死者が出ちゃったんだよね。」

「それって、私も知ってる人……?」

「うっん、まず会ったことないと思う。私らも知らない名前だったし、βにはいなかった人だって。」

「ああ、コジロー達から聞いたから間違いないだろう。」

「あつ、あの二人は無事だったんだ。」

彼らはβ時代からのギルメンで、語尾に「ござる」とつけるので

よく覚えてた。

「あの二人は 聖竜連合 に加担していて、25層のボス戦にも参加していたんだって。」

「で、死人を出したんで、解散ってこと？」

「表向きはね。」

「なによ、その言い方？ 裏事情があるの？」

「ああ、ボス攻略で軍が大敗したのは、ボスにびびって逃げ出したのがいたんだ。」

「それがきっかけでパニックが起こり、戦線が大混乱に陥ったからなんだが……」

「その最初に逃げたのがうちのギルマスだって話。」

「そこで怒った軍幹部が姿をくらませたギルマスに賞金をかけたってもつばらの噂だ。」

「まあ、そのへんは噂の域をでないんだけど、うちのギルドのせいだ！ って声がおおきいのは事実。」

「だからギルメンだってすぐにわかる格好をしていると、パーティーに入れてもらえないどころの話じゃない。」

「プレイヤーショップじゃ買い物できないし、最悪PKされるかも……」

それで二人はその格好なのか……

「だから他のプレイヤーの目につかないようにここで待ち合わせたんだ……」

「うん、そう。カスミちゃんも上に行く前にNPCショップで適当に服かって着替えなきゃ。」

「上って、結局25層でとまってるの？」

「いや、25層はそのまま 血盟騎士団 や 聖竜連合 らの活躍でクリアされた。」

四日前には軍抜きで26層も攻略され、今は27層だ。」

「軍抜きで？ いまのギルドの人達ってそんなにレベル高いの？」

「ええ。もう40超えてる人もいるって。それに軍でいっても所帯が増えすぎてコル稼ぎの方がメインで、レベル的にはトップとちょっと差が開いてたんだって。」

「トップギルドの連中はもうフィールドじゃ経験値が入らないからって、ガンガン攻略をすすめている。」

30層到達まで二週間かからないんじゃないかとまで言われてるな。」

「ふえええ、どんだけえ〜」

なんか二週間離れただけで、浦島太郎になった気分だわ……

*

*

*

食事が済むと、眠気が強烈に戻ってきたので、話を切り上げ店を出た。

すぐにも宿をとって眠りたかったが、27層に連れて行ってもらわないと街の名を知らない私じゃ

一人では行けないので（今聞いても忘れそうだし…）、服を買って（街着のワンピース。店で着替えた）

27層に移動。宿に直行し、そのままベッドへ。

うとうとしながらも頭をよぎるのは……

さて、これからどうしよう？

ボスの経験値でレベルアップしている攻略組には追いつけそうにもないし……

だからって、死んじゃうかもしれないボス戦なんて怖すぎて無理だよ〜

ああ、せっかく体術取ったのに使いどころないのかなあ〜

はあ〜あ、いいや、今は寝て、起きてから二人と相談しよう。

再会（後書き）

カスミのユバメ達に対する口調がタメ口なのは、
ツバメが「ゲームで敬語禁止！」と言ってるからです。

話し合い

話し合い

夕方、ドアをノックする音で目覚めた。

食事に行くからと、二人が起こしに来てくれたんだ。

二人とも、今は街着に着替えてる。

ツバメはへそ出しＴシャツにローライズのショートパンツ。

ハヤブサは青の開襟シャツに白のスラックス。

どちらもプレイヤーメイドの品とのことで、ちょっとしたおしゃれさんってかんじ。

生産職の人らも結構レベル上げてるんだな

私は２層で買ったやぼったいワンピース（水色）を見て、

なんか、「とほほ……」な気分だった。

*

*

*

「で、二人はいまどういうふうに動いているの？」

NPCレストランにたどり着くまではここ27層の説明を聞いてただけど、

店につき、注文も終えて、いま一番気がかりなことを訪ねた。

「それなんだが、俺達はいま生産職をあげているんだ。」

「うん、私が裁縫、ハヤブーは鍛冶。」

うわっ、そっちは考えてなかったわ……

あつ、ハヤブーっていうのは、「ハヤブサって呼びにくい！」のでツバメがつけたあざな。

当然ハヤブサは嫌がったんだけど、「ならハヤトって呼ぶよ？」

あれ？なんか急にまともじゃない？

が、「実名で呼ぶな！素に戻って恥ずかしい！！」と、どなるハヤブサ。

つまり隼人が本名でそこからつけられたのがハヤブサ（隼）ってことなんだって。閑話休題。

「レベルなら生産でも上がるからな。まあ、素材狩りに行くこともあるけど、そんな時も経験値に気を使わなくてもいいから低層区で安全に行けるし。」

「私達もそれぞれの生産ギルドに入ってて、狩り行く時もそこで大規模パーティー組んでいくんだ。裁縫なら部屋でもスキルレベルあげれるから夜も退屈しないよ。」

生産かあ……、どうにもイメージがわからないんだよねえ、これが。

メジャーな生産職で考えてみても……

鍛冶師：そりゃ私もゲーマーだから有名どころは知ってるけど、SAOにはまさに星の数ほどの数と種類の武器が存在する。かなりの武器オタでなければ注文に応じきれないんじゃないかな。

裁縫師：これは技術じゃなく、イメージが大事らしく、どちらかといえばデザイナーらしい。
が、現実でファッショ^{リアル}ン雑誌なんて見たこともない私じゃ無理っぽい。

細工師：これもデザイナー系。アクセサリーなんだけどこっちも興味なかったし。

料理師：調理自体は自動で、腕をこらすのはスパイス素材の組み合わせだつて。

外食といえばファミレスな女子高生にそんな味がわかるわけない。

とまあ、こんな感じでダメダメな私。

あつ、SAOには回復薬なんかをつくる錬金術は存在しない。

低レベルの回復薬でも需要が高すぎて、プレイヤーが安易にはし

ってしまうのを防ぐためだっ

あと店売りよりも高レベルの薬なんかが出回ると、バランスが崩れるからってのも理由じゃないかって言われてる。

「しっかし、ツバメはとにかくハヤブサは鍛冶なんて大丈夫？武器の種類ってハンパないよ？」

と自分じゃ無理っぽい問題をどうクリアするのか気になって尋ねてみた。

「ああ、それなら大丈夫。俺は刀専門を目指すから。」

「刀ってエクストラスキルじゃないかって言われてる日本刀？もう出てるの？」

「だいぶ前からもう結構でてるぞ。あれは 片手曲剣 を使ってる と出るらしい。

25層解放以降はNPCショップにも並び出したし。」

「でも、それなら先行している鍛冶師の誰かがもう作ってるんじゃないか？……」

「それがそうでもないんだ。すでにそこそこのレベルをあげた鍛冶師のメニューに刀は出てこないんだ。」

「それって……」

「そう、鍛冶師でも刀鍛冶はエクストラスキルじゃないか？って言われている。

普通、鍛冶師が使う武器はメイスとかの打撃系だろ。

そこで斬撃系っていうか刀スキルを発現させたプレイヤーが鍛冶すればできるんじゃないかって。」

「えっ、じゃあハヤブサは刀スキル発現しているの？」

「ああ、俺はβん時から曲剣使ってたからな。」

「他にも鍛冶って結構分業されててな。最初に基本武器をマスターするんだけど、そのままスキルを伸ばすと高ランクの武器は打てるんだけど、変わり種の武器は打てないそうだ。そういった武器を打つには

その系統の武器を一度は使わないといけないらしい。そういった鍛冶師はスペシャリストにはなるけど、

逆に基本武器の高ランク品はできなくなる。他にも強化を専門に育てるっていうのもいるしで、いろいろつぶしがきくんだな、これが。」

へえ〜いろいろあるんだ、っていうか結構深く考えてたんだ……

「だからさあ、カスミちゃんも危ないことやめて生産職始めない？ イメージっていても基本メニユーにあるのをアレンジするだけだし。細工師なんかレベルあげてできるのはボーナス付加だけって話だから、既存品でも売れるかも。」

あつ、それなら私でもできるかも。

でもせっかく体術とつたし、いままで育てきたスキルもおしいな

あ……

「ちよつとすぐには決められないかなあ。もう少し考えさせて。」

「まあ、カスミにはなにもかも急な話だからな。ゆっくり考えればいい。俺達ならいつでも相談に乗るし。」

「うん、すぐには無理よね。でもカスミちゃん、絶対ソロでフィールドに出たらダメよ。軍の弱体化でオレンジになる奴が増えてるらしいの。」

「後、前のギルドのことも他言禁止だ。わざわざ敵視される必要はないからな。短剣使いがAGI伸ばしてるのは当然だから格好さえ普通にしていたら問題ない。」

ああ、ほんとに心配してくれてるんだ……

二人の真摯な態度に感銘を受けたが、その一方でその真摯さこそがこの世界はデスゲームなんだという事実をあらためて認識させた。

話し合い（後書き）

生産職の内容は完全に脳内設定です。

特に鍛冶はちゃんとした設定がありそうで、怖いです。

もし、情報があれば、お教えください。

あらたな再会

あらたな再会

食事をすませ、街の案内は明日につてことで、宿に戻った。

いまは、ひとりで部屋のベッドに寝転がっている。

「あらためて、じゃない。ようやく認識したんだ……」

デスゲームという事実を。

ここにいる私は現実リアルの私じゃない。レベルを上げれば超人になれる。

そんな私が死ぬけない。とたかをくくっていたんだ。

そんな私につきつけられた現実、それは私が知っているアインクラッドはたかだか6層。

それは100層の内、たった6%でしかないということだ。しかもその6%は初心者用の低設定。

この先どんな罠が待ち受けているか予想もつかない。実際25層では想定外のボスで多数の死者が出た。

同じことがサブ迷宮やフィールドで起こらないなんて保障はまったくない。

そう考えると、生産職でレベルをあげるといふのはとてもまっとうなことだと思う。

ツバメの話聞いてみると、自分にもできそうだ。

さらに言えば、店を出して成功する必要もない。

レベルさえ上がれば、素材を売るだけでもここでの生活費を稼ぐには充分。

店を開くっていうのはモチベーションを保つための目標っていうのがほとんどじゃないかな？

もちろん拘りを持って生産職をしているプレイヤーも大勢いるだろう。

でも、そういう人は始めから生産職を選んだはず。

最近始めた、にわか生産職はそんなもんじゃないかなって思うんだ。

それを非難する気は毛頭ないし、私が心惹かれているのも確かだ。

ただ、それでいいじゃんと揺れる気持ちの中に、それはダメっていう気持ちも存在する。

なにがダメ？と聞かれても答えられないんだけど、なんかモヤモヤしているんだ。

「えーい、きりがない。散歩にでも行こっ！」

堂々巡りをする思考から抜け出すため、街に出ることにした。

*

*

*

いま生産職はどんなものを作っているのかと、露店を見てみるとにした。

最前戦の街は攻略組が持ち込むいい素材が手に入るので、生産職は街が解放されると、即移動する。

そして、いい素材で作られた高ランクの装備を求めてまた人が集まるので、最前戦の露店は結構遅くまで開いている。

武器の露店を見つけたので覗いてみる。

そついや短剣も換え時かな、

せつかくSTR上げたんだからちよつと重くても攻撃力が高いのがいいかな……

並んでいる武器はさすが最前線だけあって高レベルなものばかりだった。

ただ品揃えはオーソックスな武器のみで、スタッフ（両手棍）やスピア（短槍）といったマイナーな物は無かった。

「短剣もなしか……」

やはり攻略に挑むようなプレイヤーは奇をてらわないってことなのかな。

自分の武器が主流でないことに軽く落ち込んでいると、

「カスミさん」

プレイヤー名で呼びかけられた。

名前を知ってるってことは知り合い？誰だろう……

「はい？」

「えーと、おひさしぶり？いや、この姿ではじめてましての方がいいですか？」

「はじめましておひさしぶりであります。」

そこには見慣れぬ男性プレイヤー二人がいた。二人ともSAOではめずらしい黒のスーツ姿。

あれ？こんな口調、聞き覚えがないんだけど……

「えーと、どちらさま？」うん、素直に聞こつ。

「ははっ、この姿じゃわからないっすね。SNAKEっす。」

「自分はOWLであります。」

えー、スネークにオウルっ？あの渋顔やせマッチョの？

口調もハードボイルド風だったのに……

目の前にいるのは自分と同じ年くらいの男の子。

スネークはぽっちゃりというよりまんまるっていうのがしっくりくるおデブちゃん。

オウルは逆にひよろつていうかガリガリ？

「β 以来ですから半年ぶりっすか？カスミさんはアバターとほとんど変わらないようであつたらしいっす。」

「なんか顔もアバターに似ている気がします。」

そう、二人とはβ時代にハヤブサ、ツバメコンビの次によく遊んだギルメンだった。ん？二人？

「あれ、いつももう一人いつしよにいたよね。あの無口なFOXさん。」

「ああ、フォックスの姉御でしたら、いま露店めぐりをしてるっす。」

「です。姉御はどこに行つて、いつ帰ってくるかわからないので別行動であります。」

あつ、なるほど… って姉御？

「えっ、ちょっと待って、姉御って女性ってこと？あのフォックスさんが？」

あの人のアバターってダンディなおじさまキャラだったよね。

「そうなんっすよ。自分らもかなりキャラメイクに凝ったんっすけど、姉御は上をいってました。」

「自分らもびつくりであります。」

私もびつくりだよ。そっか、口調とか人口音声でわかるから無口だったんだ……

「でも、ほんとひさしぶり。私はすぐ はじまりの街 を離れたかなんだけど、三人の話はいままで聞かなかったんだよね。」

「まあ、βん時のフレンドリストは消えてたっすからね。」

「自分らもカスミさんを探していたのでありますが、見つける前にあの宣告がきたのであります。」

「ふん、それでどうし……」

「こらっ！あんたらなに女の子ナンパしてんの！！ 身の程を知りなさい！！」

後ろから女性の声がかぶさった。

「い、いや違うんっすよ姉^{あね}さん、」

「そ、そうであります、こ、こちらはカスミさんであります。」

「え、カスミ？あら、ほんと。うわあゝあんたはあんまり変わってないね。」

「ってことは、こちらがフォックスさん？」

「このシルバールブロンドさらさらストレートの？」

ちよつときついめの美人さんが？

私よりもふくよかな胸の谷間をみせつけているこの人が（イラッ）？

そんな私の混乱をよそに、

「いやゝすつごいひさしぶりい。ねえねえ、時間ある？どつかでお茶しないかい？」

ひとり盛り上がるフォックスさん。

「え、ええ、いいですよ、喜んで。」

混乱しながらもイエスの返事をした。

「じゃあ、いきましよう。あつ、それとあたい達にさんづけはやめてね。」

キヤラ名にさんづけつけてきらいなんだよ。」

聞きたいこともあるし……、でも聞けるかな？

あらたな再会（後書き）

ご意見、ご感想おまちしております

決意

決意

「はあ、やっぱりカスミも同世代みたいね。私らは高2だったけど、カスミは？」

「あつ、私も高2。」

フォックスが「やっぱり」という根拠はβ時のログイン時間のこと。

9月に始まったβテストでは平日の昼間はほとんど人がいなかった。

帰宅部だった私は早い時では3時すぎにはログインしていたんだけど、前後してログインしてくるのがこの3人組だった。（ハヤブサとツバメは大学生だったので、平日でも朝からインしたりしていた。）

あの時は自動切断がついてたんだよね……

βの時は長時間使用による弊害を考慮するってことで一日の稼働時間が8時間を超えると自動切断され、30分間は再接続できないように設定されてただけ……

「でも、ほんとカスミはアバターと変わらないね。私もそうしけばよかったな。」

カスミのキャラは割と自分似のモデルを選んでいたからね。（胸を少しアップしてたのはナイショ）

「それじゃあ、あの時はたいへんだったんじゃない？」

あの時っていうのはアバターが光につつまれ現実リアルの似姿へと変貌した時のことだ。

「そりゃあもう、たいへんなんでもんじゃないわよ。いきなり目の前のイケメンが縮むは薄ぺらくなるわでもうパニックよ。」

「姉あねさんこそひどかったすよ。」

「姉あねさんは今の顔に角刈りだったであります。」

そういえば髪型は変わらなかったわ…

「こらっ、嫌なことまで思いださすんじゃないよ。まあ男性専用装備が女性専用装備に代わってくれてただけは助かったけどね。じやなきゃ、下着姿までさらすことになったかも…」

ブルツと身を震わせるフォックス。

「まあ、さすがにいたたまれなくてね、ダッシュで宿に戻っちゃったよ。」

「自分も同じっす。この姿で続けたら笑い物になるって考えたら…」

「自分はこの姿が強くなるって信じられなかったっであります。」

うー、なんて言ったらいいんだろう？ そんなことないよ、なんて簡単にいっちゃダメだよね……

「それでギルドもすぐ脱退して引き籠もってただけど、一週間もしたら開き直っちゃったよ。」

「姉さんが言ってくれたんっす。『いまを逃したら二度とこのSAOで遊べなくなるんだぞ！』って。」

「それで自分らはハッと気付いたんであります。」

「犯罪が行われたゲームは間違いなく封鎖されるってことさね。ならもつたいないじゃない？

こんなすごいゲームが二度と遊べないんだから。」

「さらに後続のゲームすらどうか危ないっすから。」

「自分はもう一度ナーブギアを使う勇氣はないと思います。」

ああ、やっと納得できた。

『もつたいない』それが安全策を受け入れ難くしていた理由なんだ。

私はもつとこの世界を楽しみたいんだ。無茶かもしれないけど、ちよつとは冒険もしたいんだ。

自分ひとりで納得していると、

「姉さん、自分らは露店が閉まる前にポジション仕入れにいつてくるっす。」

「姉さんはもう少しカスミさんとおしゃべりしてるであります。」

「おや？そうかい、なんか悪いねえ。」

「いや、姉さん連れていくと寄り道して間に合わないっすから。」

「適材適所であります。」

「うるさい！とつとといっといで！！」

「じゃあ、カスミさんこれで。ハヤブサさんやツバメさんにもよろしくっす。」

「失礼するであります。」

「あつ、待つて。フレンド登録しとかなきゃ。」

慌ててメニュー画面を開く。

「おや、あの二人とも会ってるのかい？」

「あのNPCレストランで姉さんが先に出て行った後、三人できたんっすよ。」

「あの二人はまさにお似合いであります。うらやましいであります。」

「ちつ、現実でも美男美女なんてリア充めつ。」

いや、フォックスだってすごい美人だから…

*

*

*

二人が立ち去った後、今度は私の話をした。

「へえ、あのクエ受けたんだ。そんなに固かったのかい？その岩。」

「固いなんてもんじゃないわよ、まるで凶器、いや狂った器で狂器ってほうがしっくりくるね。」

「ハハハ、それで使い勝手はどう？」

「それがまだ試してないんだ。今朝クエから戻ったばかりだし。」

「なら、練習に行く時は声かけてよ。ぜひ見たいわ。悲願の体術スキルだもんね。」

「うん、そんな時はぜひお願いするわ。」

その後もたわいない話をしながらも、私は気になることを聞き出すタイミングをはかっていた。

「とりあえず装備は整えないとだし、街服も欲しいな。これ間に合わせだから。」

よし、さりげなくネタフリできたぞ。

「それにしてもフォックスは凄い格好しているね。」

フォックスは黒のボンデージ風のコルセットなのかな？それが胸まであるような下着のような上着に

ゴスロリ風のミニスカートと凄く扇情的な格好をしていた。

プラチナブロンドの髪ともあいまって、くやしいけど（主に胸が）すっごく似合っている。

「ああ、これ？半分は開き直りなんだけど、あの二人といっしょに露店覗いてたらすっごい勢いで薦められたのよ。」

うん？二人も関係するの？

「なんでもヤセとデブをひきいる美人は扇情的な格好をするのがデフォだっというのよ。」

ああ、確かになんかそんな絵を見たことあったな……なんのゲームだったけ？

「で、二人にもいまのスーツを薦めてきてね。あまりの勢いに押されてつい買っちゃたんだよ。」

うっし、ファーストミッション、クリア！といってもこれはジャブ。

これから繰り出す右ストレートが決まるか!?

「あともうひとつ聞きたい事があるんだけど……」

うう、声がちいさくなっていく…、頑張れ自分!

「なに?」

「βの時のことなんだけど…」

あつ、いまフォックスの肩がビクンとなった、くつ、いけるか!?

「あの…アレ、確認した?」

よしっ、言い切った、よくやった自分。

ガバツと立ち上がり顔を真っ赤にするフォックス（SAOは感情表現がオーバーだからホントに真っ赤）

「バ、バ、あ、あん……」 言葉にならないフォックス。

「え、え〜と、どう?」

上目づかいでさらに尋ねる。ここはひいちゃダメだ。ああ、でもいま私の顔も絶対真っ赤だ。

「……見てない……」

観念したのか、椅子に座りなおすと、うつむきながら小声で答えてくれた。

「えゝ、どうしてえ？」 いや、どうしてもないんだろっけど…

「……βの時は下着が脱げなかったの。だから……」

律儀に答えてくれた。エエ子や。

「あるにはあったの？」 なんか遠慮がなくなってきたなあ…

「うん、上からさわったらなんかついてた……」

うわっ、言っつて恥ずかしくなったのか、真っ赤を通り越して顔が赤く発光しているよゝ

うう、調子に乗りすぎたゝ、この空気どうしよっ？

右ストレートにカウンターをくらっちゃったよゝ

決意（後書き）

今回、β時のログインにふれていますが、SAOの時間は現実とリンクしているみたいなんですえ。

それだと、普段インした時って夜ばかりってことになるんだけど…

ALOはゲーム時間の一日を16時間に行っていると明記されてるんですが…

一応脳内設定として「SAO時間は現実の6時間遅れ」ってのを考えたんですけど

こじつけっぽいので書くのをやめました。

新しい武器

新しい武器

翌朝、ハヤブサとツバメとの三人で宿の朝食を取りながら、私が決めたことを二人に話した。

「じゃあ、攻略中心でいくのね。」

「うん、って言ってもボス攻略は無理だし、ミニダンジョンやイベントクエなんかをクリアしていきたくないあつて。」

「どこかのギルドにはいるのか？」

「うん、その気はないかな。縛られたくないし、用心棒的な形でパーティーに参加できればってかんじ？」

「といつても、攻略組以外はそんなレベル差ないでしょ。わざわざ他人を入れるかどうか……」

「その辺は生産スキルで補おうかなあつて。だからツバメ、裁縫スキルの上げ方教えてね。」

後は、攻撃スキルを上げていくのも考えてる。」

「じゃあ、すぐに探索に乗り出すってわけではないんだな。」

「もちろんだよ！まだ体術スキルを使ったことないし、武器も装備も新調したいしね。」

ハヤブサも体術スキルのコツを教えてね。」

「それはOKだが、俺もあんまり使ってないんだよなあ……っていうか使うような状況になるとやばすぎる。」

「そっなの？ そっいや2、3回しか見てないわね。」

「ああ、手が届く距離まで詰められてるっていうのがやばい。ホントすっげえあせるから。」

えゝ、そんなの聞いてないよゝ。 まあ、なんでも試してみないただけだね。

「じゃあ、今日はどうするう？ まあ優先するのは装備かな？」

「だな。防具は軽装だし、この層の素材での製品も結構出回ってるから問題ないだろ。」

だが、武器は頼んで作ってもらわないと無理だろうな。」

うん、昨日見た露店でも無かったしね。

「まあ、そっちも心当たりはあるから大丈夫だ。ただ時間がかかるかもしれないから先にそっちにいこう。」

「うわっ、ありがとう。」 うん、頼りになるなゝ。

*

*

*

というわけで、やってきました鍛冶ギルド。ツバメは「うるさいからいけない」っとお留守番。

鍛冶ギルドにかぎらず生産系のギルドは最新の街で貸し出される作業場を借りてギルメンに場所を提供している。

私の武器を作ってくれそうな鍛冶師さんがここにきていることはハヤブサがフレンドリストで確認済み。

要件もメールしているので早速、お願いにいった。

カンシヨウと名乗った鍛冶師さんは、

「欲しいのは短剣と聞いたが、どんなのを使ってきたんだ？やっぱリダガータイプか？」

話もそこに武器について聞いてきた。なんか職人的なオーラがでまくってとつつきにくい。

「あの〜こんなのを使ってるんですけど……」

おそろおそろ所持している短剣を差し出す。NPC品だが+8まで強化した愛用の一品だ。

「ほう、ククリか…、なかなかいい趣味しているな」

ニヤリと笑うカンシヨウさん。うう、なんか怖いよ〜

「で、このサイズで素材違いを作ればいいのか？これならインゴツ

ト1個で余裕でできるが?」

「あの、その形状で、できるだけ大きく作ってもらいたいんですけど……」

「ほう、これも刃渡り40cm近くはあるぞ。短剣としては大振りな方だが?」

「そうなんですか? じゃあ、それ以上は無理なら重さだけでも上げてもらえたら……」

「いや、重さは高ランクの素材を使えば、普通に重くなるんだが……」

なにか考え込むカンショウさん。

「刀があるなら脇差もあるだろうし、大脇差なら長さは……」

ぶつぶつ独り言を言いながら、メニュー画面を開きククリ刀の数値を変更していく。

「よしっ、認証された! 喜べ。希望どおりのものができぞ!」

いうやいなや、返事を待たずにインゴットを叩きだす。

「邪魔になるから、できるまで外で待とう。」

*

*

*

5分ほど待っていると、ドアが開いた。

「できたぞ！会心のデキだ！！」

うれしそうな笑顔でカンショウさんが告げた。

作業場に戻った私の前に横たわる一品は、短剣と呼ぶのが戸惑われる巨大な物体だった。

「名前は ディア・ハンター か。まあレア素材ってわけでもないし平凡な名前でも仕方ないか……」

その ディア・ハンター と名付けられた剣はとにかく圧倒的だった。

もちろん、1mを越えるような両手剣に比べたら小さいよ。でも全体的にすっきりとしているそれらに対し、湾曲した刃が醸し出す雰囲気は存在感っていうか禍々しさが半端ない。

「刃渡り60cm。大脇差がだいたい60cmだから60cm以下ならできると踏んだんだが上手くいった。」

こんな大きな片手で持てるのかな？まずは両手で……

「使ったインゴットは通常の片手剣と変わらない。なんたって脇差と違って幅も厚みもあるからな。」

そういえば、片手剣も普通70cmくらいだね。そんなにかわ

らないじゃん。で、幅も厚みもあるつと。でも逆に片手剣と思えば、振れないこともないのかな。おっ、いけるいける。

「ほう、要求筋力値はかなり高めなんだが、苦にしてなさそうだな。」

うん、だいじょうぶ。両手剣を振り回してたのに比べたら軽い、軽い。

「ハハ、こんな女の子がこんなごつつい刀を軽々振り回すんだからな。ゲームとはいえ不思議な感覚だよ。」

「あとは鞘だな。革製の方が軽くて動きやすいだろう。後ろ腰に水平に指すのがいいな。」

いいながら材料を取り出すと、ちゃっちゃんと作り上げていった。

「強化の素材はここでは出ないな。まあ集まれば持つてきな。いまでも片手剣に近い攻撃力だ。強化すれば40層代でもいけるかもしれん。」

「それよりも、鉱石がランクアップしたら作り直した方が早いんじゃないか？形状自体は規格品なんだろう？」

「それもそうだ。強化素材集めよりは楽だし確実だな。よしっ、これから2代目、3代目と作ってやるから、ちゃんと俺んとこに来いよ。こんな変なのつくのは俺ぐらいなもんだからな。」

うん、ちゃんとお願いにきます。楽しんだくれたみたいで、こっちまでうれしい。

＊

＊

＊

この後、ひとりで宿に戻ってツバメとおでかけ。ハヤブサは女の
買い物は疲れるからパスつと作業場に残った。

で、買った装備は赤の革製ノースリーブのワンピースに同色の肘
上まである小手。武器重量が増えたので、鎖帷子はパス。下は黒字
に赤い刺繍のはいつたレギンスに黒のロングブーツとなった。腰に
投擲武器用のフォルダーがついたベルトを巻いて完成。

さらに、街着も買いに行ったんだが、ツバメの着せ替え人形と化
してしまった。

うう、疲れたよぉ

新しい武器（後書き）

大脇差は60cmとっていますが、定義として2尺未満がそれにあ
たると

あるのでそのように設定しました。

実際は1尺9寸などが主流のようで、60cmありません。
ただククリには刃渡り1mなんてものもあるようです。

体術スキル（前書き）

ついに戦闘です

体術スキル

体術スキル

「わあゝ、ホントにあんたがあのフォックス？ めちゃくちゃ美人じゃない！」

あいさつよりも先にフォックスを確認するやいなやツバメが抱きついた。

「ねえ、こんな美人なのに、なんでおっさんキャラでプレイしてたの？」

「お、おっさん……」

あつ、おっさんって言われてフォックスが落ち込んでいる。力作だったんだろうなあゝ

「はじめましておひさしぶりっす、ハヤブサさん、ツバメさん。スネークっす。」

「はじめましておひさしぶりであります。自分はオウルであります。」

なんだか… そのあいさつ定着しちゃったの？ そっぴやスネークとオウルはさんづけを嫌がるくせに
こちらはさんづけで呼ぶんだよねゝ まあ私は拘らないけど……

「ああ、ひさしぶり、ハヤブサだ。話はカスミから聞いている。今日はよろしく頼む。」

いま私達が集まっているのは、27層のゲート前。

今日は私の体術スキルの練習と裁縫スキル用の初期素材集めを兼ねて、低層域に出かける。

フォックスも見たいと言っていたので声をかけると、即OK。スネークとオウルもついてくるって。

六人でパーティー組んで、向かったのは第5層。狙いは グレー トホーン という鹿型のMob。

第一層からいる鹿型Mobの最上級種。ドロップする皮が軽装用の肩当てや肘当てにいいんだ。

ツバメいわく、この皮ひとつで肘当て2枚と膝当て2枚がつくれる。一枚加工でスキルレベルが1上がる。スキルレベル100まではこれでいけるが、それ以降は別のモノを作らないとダメ、とのこと。

5層程度の敵ならステータスでのゴリ押しも可能だから、安全に体術スキルを試せるんじゃない？

軽く言うツバメの横でハヤブサは青い顔をして黙ってしまった。

*

*

*

第5層 フィールド区

鹿の生息地についた一行。

「じゃあ、まずお手本見せて、ハヤブー。」

「ふう〜、いくけど、リンクしてくるのの退治はまかせるからな！」

ため息をついて、とぼとぼと鹿に近づくハヤブサ。

鹿はノンアクティブMobなので、攻撃しない限り真横に立って
も何もしてこない。

鹿の横に立ったハヤブサは腰を落とし、右の中段突きを繰り出した。

その攻撃で鹿が半歩分飛ばされる。

攻撃されたことで敵対行動をとろうと鹿が振り向くところに右の
回し蹴りがクリーンヒット。

力つきる鹿を見て、

「うわ〜、すごい！」

「やるじゃない、ハヤブー。」

「ほうゝ、たいしたもんだねえ」

「やっぱり足技はいいっすね、うん。」

「投げ技や絞め技とかはないでありますか？」

五人の称讃に気を良くしたハヤブサだったが、周りの鹿が一斉に向かってくるのを見て青ざめる。

「お、おいつ、しゃべってないで手伝って!!」

応援要請をしながら、間近にせまった鹿に回し蹴り。
だが、鹿の突進の方が早く、足が当たる前に吹っ飛ばされる。

「ワハハハハハッ」

「ツバメ、笑ってないで、助ける!!」

鹿は一頭が攻撃されると周辺の鹿も敵対行動をとる。こういった行動はリンクMobって言われている。

残り一頭にしてから練習するほうがいいよね……

そう考えた私は腰から ディアハンター （鹿狩り） を引き抜く。

試し切りが鹿なんてしゃれてるじゃない。

先程ハヤブサを吹き飛ばした鹿が私に気付き、突進してくる。

斜め上に飛びあがり突進をかわすと、鹿の胴に ディアハンター

を振り下ろす。

「はえ？」

鹿は前後に分かたれ、2か所でポリゴン片の爆散を起こす。

鹿を一刀両断って……これって短剣の攻撃範囲じゃないね…

周囲を見渡すと、皆それぞれの武器を手に鹿をさばいている。

スネークが手にしているのは青竜刀かな。防具も中国の武狭みた
い。

彼も私と同じく 軽業 をスロットに入れているので飛んだり跳
ねたり目まぐるしい。

オウルはAGI極をやめたようで、両手剣を構えている。
装備も金属製のライトアーマー。 武器防御 も使って、いなし
ながらの攻撃。

フォックスもパワーファイターに転身したようだ。

今構えてるのはランス。相手によってはメイスと斧も使っているら
しい。 本人いわく、

「目指せハルバード!!」 だそうだ。

「突進対決〜!!」

と叫びながら、フルプレート装備で鹿の突進を正面から突き崩し
ている。 ようやるわ…

笑いを納めたツバメも突進をひらひらかわしながら、スピア（短槍）で突きまくっている。

「AGIは上げたいけどMobに近づくのはイヤッ！」なツバメが選んだのがスピア。

彼女の装備はといえば、布製の白い半袖シャツにはえりとリボンがついていて、下はこれも布製のチェックのミニ。ショートブーツに膝下のすね当てとまるでなんちゃって女子高生だ。

吹っ飛ばしから立ち直ったハヤブサも日本刀を抜いて鹿に向かっていく。

突進する鹿に上段からの振り下ろし。あっ、またタイミングずれた。

ふたたび吹っ飛ばされるハヤブサ。あいかわらず見極めが下手だ。

鹿はどのランクも攻撃は突進しかしてこない。

βから数えると、それこそ何百匹も狩ってきた鹿なのに、ハヤブサは毎回吹っ飛んでいる。

「ハハハ、ハヤブサのへったくそ〜」ツバメのヤジが飛ぶ。

二匹目の鹿の首をはねたところであらためて様子をつかがつと、皆も二匹目をそれぞれ相手している。

他に鹿がないのを確認すると、私はハヤブサの方に向かった。

「まってー！そいつに体術試してみる！！」

そう叫ぶと、返事を待たずにモーションを始動。ステップからの横蹴りを鹿の側面にあてる。

横に飛ばされ、体制を崩す鹿に踏みこんでからの蹴り上げを当てると鹿はあっさり昇天。

なんかこれってストレス発散にいいかも…

昨晚、訓練所のかかしで練習しておいたんだけど、実践でこうも上手くいくとは…二へへ。

ニマニマしている私に、

「助かったよ、カスミ。どうも鹿は苦手だ……」

お礼をいうハヤブサ。

「あんたは戦闘そのものが苦手でしょ！」

突っ込むツバメ。

そうなのだ。情報収集にだけ、的確なアドバイスで街では頼りになるハヤブサも、こと、戦闘になるとたんにヘタレになっちゃうんだよね〜

「じゃあ、今度は皆で一斉に一匹づつ狩って、あとはカスミにスイ

ツチつてのでもいいかい？」

「そつつすね。湧く数は変わらなかったはずっすから。」

「自分も2匹までなら問題ないであります。」

「ほらっ、ハヤブーも不意打ちで一匹ならいけるわよね！？後はカスミちゃんに向かって逃げなさい！」

「ああ、情けないけどそうさせてもらっよ。カスミはいけるよな？」

「だいじょうぶだよ。やばかったら武器も使うし。」

「あっ、もう次のが湧いてるわよ。そういえばドロップはあったの？」

「そうだ、そっちの目的を忘れていた、どれどれ……」

「あっ、私、3つある！」 「私は2いゝ」 「あたいは1だわ。」
「俺も1っす。」 「自分は2であります。」 「俺、無いわ……」

「そっいや、ハヤブサってドロップ運も悪かったよね……」

体術スキル（後書き）

前書きで戦闘と書いておきながらなんですが、ただの鹿狩りです。モンハンのガウシカを連想していただければわかりやすいかも。

あつ、ティガみたいなのを乱入させてもよかったかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1449ba/>

ソードアートオンライン くのいち忍法伝

2012年1月5日12時50分発行